

第5回京都市産業科学技術推進委員会 議事要旨

(開催要領)

- 1 日時 平成21年11月26日(木) 11:20～13:00
- 2 場所 平安会館呉竹の間
- 3 出席者 堀場委員長, 小谷委員, 高木委員, 竹内委員, 細見委員

(議事次第)

- 1 開会
- 2 議題
 - (1) 京都市産業科学技術振興計画の進ちょく状況について
 - (2) 京都市の医・工・薬産学公連携について
 - (3) 委員意見交換
 - (4) その他

(概要)

- 1 事務局から資料説明
配布資料について事務局から説明を行った。
- 2 意見交換
 - 事業仕分けで知的クラスター創成事業等, 文部科学省の産学官連携の施策は廃止となっているが, 国の予算がなくても, 自分たちの力で進めるぐらいの気持ちが必要ではないか。
 - 知的クラスター創成事業や地域結集型共同研究事業で行っている研究は次の産業につながるものである。
 - 医工連携については, 技術面のことばかりが取り上げられるが, 医工連携により医療がどのように変わり, 我々の生活にどのようなメリットがあるのかということを発信する必要がある。例えば, 高度な診断ができる拠点が増えて長い時間病院で待たなくて済むであるとか, 入院が不要になるであるとか, 未来社会のイメージを大きく示す必要がある。個別の技術の話だけでは視点が狭いのではないかと思う。
 - 確かに今までの医工連携の議論は個々のパーツごとの議論であった。現在行っている研

究開発が全体の中でどの位置にあるのかということを知ったうえで、研究開発を進める必要がある。

- 医工と社会の連携といった視点が必要。

- 事業仕分けの影響を考える必要がある。地域結集型共同研究事業は今年度で事業が終了するので一定目的を達成したが、知的クラスター創成事業は今後も地域の科学技術の核となる事業である。

- 国の予算を復活させることが一番であり、それに向けて取組を進める必要がある。ただ、復活できなくとも、今までの成果を生かせるよう取組を継続する必要がある。

- 12月に文化環境京都会議を開催する。環境問題の解決には文化的な要素が深く関係してくると思う。環境技術の開発の主役は企業であるが、京都は文化の中心地であり、その京都で島津製作所や堀場製作所等の企業の方々と議論をしたいと考えている。会議の最後には宣言文を出し、これからの環境問題への企業の社会的責任（CSR）や企業と芸術家とのコラボレーション等について盛り込みたいと考えている。
- 将来的には、ダボス会議のように世界中から人が集まる会議にしたい。

- 環境とは文化そのものであり、自然の良さをセンシングすることが文化と考える。

- 色々なものの良さがわかる感覚が文化に密接に関係している。その感覚がない状況で技術だけを考えても、良い技術は生まれない。

- 外国人でも、いいものが理解できる人は京都に来る。その部分の宣伝力が足りないのでは。

- 京都の人は美意識と微細なものに気づくセンサーがある。他地域の方とは違ったものの見方をしていると思う。京都の方のものの見方や発想をいかに見える形にしていくかが重要である。

- イノベーションはクオリアと同じである。良いものを感じるセンサーは重要であるが、単にすごいと思うだけでなく、それを使って製品化し、世に出し、社会的に貢献することが必要である。そこまで取り組むことで初めてイノベーションが創出される。
- 日本人は、すごいなと思っても、それを実行する力が弱い。ただ、京都人は、ベンチャーがたくさん起こっていることから考えても、良いと思ったものを形にしようとする意欲が日本人平均より高く、イノベティブである。
- 良いものを感じられるセンシング能力があれば、それを実行に移す力は、努力をすれば後天的に身につけることができる。
- 京都の現代の産業のルーツは伝統産業にある。伝統産業と言われる産業も、それぞれの時代では最先端の技術であり、それが発展することで先端産業につながってきた。

- それを支えてきたのが、まさに文化である。

- 文化環境京都会議では、自然の良さを感じられる日本人のセンシング能力について、単に情緒というレベルではなく、世界の人に理解してもらえるよう、理論的に整理して、発信していきたい。